

特 集 呼吸器

巻頭言

昭和大学医学部内科学講座（呼吸器アレルギー内科学部門）

相良 博典

近年の呼吸器疾患の診断および治療戦略は目覚ましい進歩がみられる。

今までの治療と大きく変わりつつあるのは生物学的製剤の登場であり、また今後さらに多くの薬剤が市場に出てくる可能性がある。

喘息の治療は、吸入ステロイドと長時間作用性 $\beta_2$ 刺激薬の配合剤が出て、殆どの患者はコントロール可能になってきたが、更に長時間作用性抗コリン薬が長期薬物療法の一つとして加わった。重症喘息においては生物学的製剤のオマリズマブが使用されていたが、最近では好酸球性喘息としてメボリズマブ、ベンラリズマブが新たに加わったことで治療の幅が広がった。COPDでは長時間作用性抗コリン薬、長時間作用性 $\beta_2$ 刺激薬の配合剤が登場し治療の簡便さが呼吸困難感の軽減にもつながっている。また増悪を起こしやすい症例には吸入ステロイドの併用で更にコントロールしやすくなり、今後3剤の配合剤も発売が控えている。更に、好酸球性COPDに対しての生物学的製剤の戦略も多くの治験から有効性が示され近い将来適応を取る可能性もある。結核は最近徐々に増えつつあり、特に高齢者あるいは

基礎疾患を有する患者にはしっかりと診断をつけることが重要である。間質性肺炎は、現在多くのバイオ製剤が登場してきたこともあり、最近徐々に増えつつある疾患である。生命予後が必ずしも良くないため早期診断の重要性および早期治療介入が重要である。現在、ピルフェニドン、ニンテダニブの抗線維化薬があるが、今後本疾患においても生物学的製剤が登場してくる可能性がある。肺血栓塞栓症、急性肺障害においては、特に早期に診断をつけて治療介入する必要性があり、その診断のポイントを理解しておく必要がある。アレルギー性気管支肺アスペルギルス症、肺真菌症においては、今や珍しい疾患でもなくなりつつあり、診断法や治療戦略の重要性を理解しておく必要がある。

今回取り上げた、呼吸器疾患はいずれも重要な疾患であり、かつ日常の診療においても遭遇するケースが高いものである。執筆された各位は、いずれもその道のエキスパートであり、分かりやすく記載されている。本書を読まれた皆様には多くの情報が共有され、日常診療における診断および治療の幅が広がっていくものと思われる。